

戦争が変えた人生を追って

文化

詩集「独りぼっちの人生」を出版



1949年荒川区南千住の機械工場を営む家に生まれる。和洋女子大学国文科卒。大田区在住。現在、ニッポン放送テレホン人生相談回答者。全国空襲被害者連絡協議会の運動に携わっている

詩人の浅見洋子さん(62)が昨年7月、コールサック社から出版した詩集「独りぼっちの人生」は、空襲被害者が国の責任を問う初の裁判「東京大空襲訴訟」の中で生まれた一冊です。孤独や差別に苦しみながら、原告が裁判に立ち上る姿が表現され、朗読会の開催など、震災孤児の目から空襲を描く詩集への反響が止みません。

浅見洋子さん

東京で生まれ、育った浅見さんは1984年、実兄の全弘(まさひろ)さんを書いた詩集「歩道橋」でデビューし、「アルコール中毒」や「水俣のころ」、学校内での子ども事故などをテーマにした「もぎとられた青春」などの作品を書き続けてきました。詩集は6章に分かれ、章ごとに数連の詩で、原告らの人生を追っていきます。「独りぼっちの人生」16歳の「智恵子」の章でテーマとなるの

は、第一審の東京地裁で陳述し、2010年12月の判決が出されて間もなく亡くなった石川智恵子さんが、原告に加わっていくまでの生活。私は今でも夕日が嫌いです」と、静かに語りかけるように始まる詩「夕日(別項)」は、圧巻で胸を打ちます。続く「うばわれた魂」三歳の由美子「は、空襲の夜、まだ幼かったため、背中におぶわれて焼夷弾を花火のように見ている青木由美子さんがその後、父の実家など家を転々としていく姿を書いた詩です。

兄の苦しみ的一端も

詩集にはもう一つ、兄の生き

様を書いた詩が収められている見落とせない章「三ノ輪の町で」八歳のマサヒロ「があります。アルコール中毒になり、妹や家族に迷惑をかけて46歳で亡くなった兄をこの詩集に加えた理由を聞くと、浅見さんは「私にこういう兄がいたことで、原告の方々が心を開いてくれた」と話します。

私は／今でも／夕日が／嫌いです／語気を強め／言い切る
石川智恵子／六九歳／東京大空襲訴訟で／証人尋問にたつ
彼女／打合せ場所を／わが家にした／代理人の夫／二人の／傍らで／茶を入れながら／彼女の話を／聞き入った

「なぜ兄はあんなに人生を憎んでいたのか」亡くなった後もずっと気にかかっていたが、原告の話聞きながらその苦しみの一端が分かりました。苦しみの一端が分かりました。誰しも皆、幸せになりたいと願っているのに、戦争が人生を変えてしまつたのです」と、浅見さんは感慨をこめます。

卒業制作で絵本に

浅見さんは事実を平明に客観視する作風が「詩になじみがないう人の心をとらえる」と評される書き手です。浅見さんが、今回の本に収録した詩作に取り掛かったのは昨年6月のこと。3月に起きた東日本大震災の被害を報道する番組を見て、大空襲と同じように荒地になった東北の街の風景に衝撃を受けていたといいます。「何かしなくては」と考えていた浅見さんのもとに、墨田区



2000円＋税。下は収録された中学生の作品

立文花中学校の美術教諭、深見響子さんが、中学3年生の生徒が制作した絵本「独りぼっちの人生」を見てもらいたいと訪ねてきました。深見さんは「またま買い求めた詩集で読んだ、浅見さんの詩(「独りぼっちの人生」)に感銘を受け、絵本制作を生徒に提案。中学3年生がそれぞれ、創作しました。浅見さんは次世代の若者のイラストを「宝物をもらつた」と喜び詩集に収めました。出版後、浅見さんのもとに、100通を超える感想が届いています。昨年11月に開かれた朗読とおはなしの夕べ「東京大空襲」心を壊された子どもたちでは、俳優座の岩崎加根子さんが詩集を再構成して朗読。みことな語り「詩が朗読でさらに高められる豊かさ」「子どもの声が届くように」などの感想が届いています。